



巻 頭 言

読 む こ と、書 く こ と

萩 原 宏*

今日われわれは大病でもない限り、一日として文字を読まないことはなからう。しかし、読むということを考えてみると意外にむずかしい。特に、情報化時代の今日、読むべきものが多すぎて、ますます、読むことがむずかしくなっている。

ものを読むに当って、読む目的と対象とによっていろいろの読み方があるだろうが、ここでは一応調査研究のために学術論文や専門学術書を読む場合を念頭において考えてみよう。

まず最初に表題によって取り上げるか否かをきめ、内容梗概あるいはまえがき（と場合によってはむすびと）を読んで本文を読むか否かをきめるだろう。本文を読むに当っては、最初から丁寧に読むこともあろうし、ざっと通読して何が書いてあるのかその大要を知っただけで終ることもあろうし、更に、必要に応じて部分的に、あるいは全体を通して丁寧に読み直すこともあろう。こうして読みはじめて、内容を虚心坦懐に読んで事実を事実として素直に受け入れることもあろうし、その内容について何か先入見をもって読む場合もあろうし、あるいは批判的な見方から読むこともあるだろう。また、書かれた目的や背景あるいは環境などにまで気を配って読むこともあり、さらに、文字によって表現されていない事柄まで読みとろうと努力することもあるだろう。こういう眼光紙背に徹するような読み方はなかなか容易ではない。しかし、簡単にざらりと書き流されているようなところに、往々にして意外に重要な意味が含まれていることもある。逆に、くどくどと書かれてはいるが内容は空虚な場合もある。また、ものによってはさまざまな解釈が可能になることもあるだろう。いずれにしても、他人の書いたものをすべて、正確に読み、正しく理解することは容易なことではない。

読むことについてこう考えてくると、あらためて書くことのむずかしさに思い至る。まず、ものを書くに

当っては、ふつう少なくとも、どういう情報を読者に伝えようとするのか、どの程度の知識をもった人々を対象とするのか、という程度のことは考えて、自分の意図することを十分に理解してもらおうと思って筆をとるであろう。しかし、いろいろな事情から必ずしも満足できるように書けるとは限らない。しかも、書かれたものは、必ずしも、最初に考えたような読者によって、予想したような読まれ方をするととは限らない。上に述べたようなさまざまな読み方で、各人各様の解釈をして読まれるだろう。何気なく書いたことが、ある読者には重大な意味をもつものとして受け取られて、予想もしなかった貢献をすることもあるだろう。反対に、十分強調するつもりで書いたことが、全く理解されずに読み捨てられることもある。また、著者の意図とは違った別の解釈をされて、新しい発展に導くこともあるかも知れない。さらに、内容を誤解されて、思わぬ重大な結果を招くこともあるかも知れない。広範な読者を対象にして、意図したことを正確に理解してもらうことは決して容易なことではない。しかし、書く立場からは、必要な情報を正確に伝えるように、少なくとも誤解されることだけは避けるように努めなければならぬ。そのためには、字句を選び、表現を工夫し、体裁を整えることも必要ではあるが、まず、主張しようとする事柄を明確にして、わかり易い記述をすることであり、さらに、読者のさまざまな受け取り方についての配慮も必要であろう。

こう考えてみたとき、文書による情報の伝達のむずかしさが身にしみてくる。われわれは、読む立場では一字一句もゆるがせにせず、背景や事情にまで注意して、正確に読むように努力すべきであらうし、書く立場では読者の知識や環境についても配慮して正しく理解されるように努めなければならない。

いずれにせよ、時間的な余裕と、精神的なゆとりとが必要になる。
(昭和52年11月17日)

* 本会理事 京都大学工学部教授